九州ルーテル学院大学における生成 AI（人工知能）利用ガイドライン

はじめに

近年、生成 AI をはじめとする人工知能技術は、教育・研究・業務のあらゆる場面で急速に普及し、その活用方法は多様化しています。これらの技術は、情報整理や文章作成、アイデア発想など、人間の学習や創造を支援する強力なツールとなり得ます。一方で、誤情報の拡散、個人情報や機密情報の漏洩、著作権侵害など、適切な利用を怠ると重大なリスクを伴うことも事実です。

本ガイドラインは、「教育・学習過程における AI（人工知能）技術の使用に関する方針」に基づき、九州ルーテル学院大学における生成 AI の利用に関する基本的な考え方と注意点を示すものです。目的は、AI 技術の利点を最大限に活かしつつ、学修成果や研究倫理、個人情報保護を損なわない安全な利用を促進することにあります。

最終的な判断と責任は AI ではなく人間にあります。学生・教職員は、本ガイドラインを参考にしながら、授業、学習、研究、業務の目的に照らして「この利用は適切か」を自ら考え、良識に基づいて行動してください。

1. 生成 AI とは何か？

① 定義

生成 AI とは、大量のテキスト・画像・音声・ソースコードなどのデータからパターンを学習し、新しい文章や画像、音声、プログラムコードなどを自動的に「生成」する AI 技術の総称です。従来の検索エンジンのように既存情報を探してくるだけでなく、「要約する」「書き換える」「翻訳する」「アイデアを出す」など、人間の言語活動や創作活動を支援できる点に大きな利点があります。一方で、学習データやアルゴリズムの性質上、誤った情報をもっともらしく提示したり、学習データに含まれる偏りや差別的表現をそのまま反映したりしてしまうといったリスクもあるため、メリットとリスクを理解した上で利用する必要があります。

② どのようなサービスがあるのか

代表的な生成 AI サービスには、以下のようなものがあります。

- ・テキスト生成型 AI
- ・画像・動画生成型 AI
- ・プログラミング支援 AI
- ・オフィス・ブラウザに組み込まれた AI

これらは、レポートや資料のたたき台作成、メール文案の作成、アイデア出し、プログラムのデバッグ支援など、教育・研究・業務の多くの場面で効率化や発想支援というメリットをもたらしますが、後述する情報漏洩や権利侵害のリスクを踏まえ、用途と入力内容を慎重に選ぶ必要があります。

2. 生成 AI の利用に関する基本的な考え方

① 生成 AI の利用に関して一律に禁止することは行わない

生成 AI には、作業の効率化だけでなく、文章作成が苦手な人や日本語・外国語が母語でない人の支援、アイデアの拡散・収束支援など、多くの教育的・社会的メリットがあります。そのため、

本ガイドラインでは、生成 AI を一律に禁止するのではなく、学修成果や研究倫理、個人情報保護を損なわない範囲で、適切なルールのもとで活用することを基本とします。

② 新たな技術が登場するとき、その利用・活用の方法が確立するまでは様々なトラブルに巻き込まれる可能性がある

新しい技術が普及する過程では、想定していなかった使われ方や、規制・判例が追いついていないことに起因するトラブルが生じがちです。生成 AI についても、個人情報の漏洩、著作権や肖像権の侵害、誤情報の拡散、レポートや論文の不正利用（剽窃）などの問題が国内外で報告されています。こうしたリスクを正しく理解し、危険な使い方を避けることが、利用者一人ひとりに求められます。

③トラブルに巻き込まれないためには、適切に利用するためのリテラシーを身につける必要がある

そのため、単に特定のサービス名を覚えるのではなく、「どのような情報を入力してはいけないか」「出力結果をどのように検証するか」「契約条件やプライバシーポリシーをどう確認するか」といった、生成 AI を安全かつ効果的に利用するためのリテラシーを身につけることが重要です。本ガイドラインは、そのための基本的な考え方と注意点を示すものです。

④ 本ガイドラインは、生成 AI を適切に利用するための基本的リテラシーを示すものであるが、最終的な判断は人間が行うものであることから、学生・教職員の良識に基づき、この利用は適切かということをよく考えて利用してほしい

最終的な判断と責任は、生成 AI ではなく人間にあります。学生・教職員は、本ガイドラインや各授業・各研究室のルールを踏まえた上で、「この使い方は学修・研究・業務の目的に照らして適切か」「他者の権利やプライバシーを侵害していないか」を自ら考え、良識に基づいて利用してください。

3. 生成 AI の利活用に関する全体的な留意点

① 情報漏洩リスク

生成 AI サービスの多くは、入力されたプロンプト（質問・指示）やアップロードしたファイルを、サービスの品質向上や不正利用の監視のために一定期間保存します。設定や契約によっては、これらが学習データとして二次利用される場合もあります。そのため、以下の情報を入力しないよう注意してください。

・氏名・学籍番号・住所・連絡先・健康情報・経済状況などの個人情報
・成績や評価に関する情報
・未公開の研究データや企業との共同研究に関わる機密情報
・試験問題や答案など、外部に漏れると重大な不利益が生じる情報

② 権利侵害リスク

生成 AI は、学習の過程で取得した著作物の特徴を踏まえてコンテンツを生成します。その結果として、特定の小説や論文、画像、楽曲などに酷似した内容が出力される場合があり、無断で公表・配布すると著作権侵害にあたるおそれがあります。また、他者が権利を持つ資料（市販の

教材、論文 PDF、受託研究のデータなど）をそのまま入力し、サービスのサーバにコピーを残すことも、契約や著作権上の問題を生む可能性があります。生成された文章や画像等を外部に公開したり、学会発表・出版物に用いる場合には、元となる著作物への依存度（類似性・依拠性）や契約条件を確認し、必要に応じて引用表示や許諾の取得を行ってください。

③ 誤情報リスク（ハルシネーション）

生成 AI は、「もっともらしい」文章を作ることに優れていますが、事実の正確さや根拠の有無を自動的に保証するものではありません。存在しない文献や判例を捏造したり、数値データや統計結果を誤って提示したりする（ハルシネーション）ことがしばしばあります。そのため、生成 AI から得た情報をレポート・論文・資料等に用いる場合は、必ず一次情報や信頼できる文献・公的機関の資料等で裏付けを取り、出典を明確にしてください。特に、医療・法律・安全保障・人権など、人の生命・権利に関わる領域では、専門家の確認を経ない情報をそのまま利用しないことが重要です。

④ 契約・規約文書の確認

生成 AI サービスを利用する前に、必ず利用規約・プライバシーポリシー等の契約文書を確認してください。特に、①入力データが学習や二次利用に使われるかどうか、②入力データや出力結果がどこに保存され、誰がアクセスできるか、③生成されたコンテンツの著作権や利用権が利用者にどこまで帰属するか、といった点は、情報漏洩リスクや権利処理に直結します。内容が理解しにくい場合は、「IR・情報室」に相談し、個人の判断で高リスクな使い方をしないようにしてください。

⑤ 迷った際にはリスク確認

生成 AI サービスを利用する前に、必ず「高リスク AI*」に該当しないかを確認してください。特に、個人情報・機密情報を入力するかどうか、AI の判断により利用者や第三者の権利・利益が大きく左右されないか、といった観点が重要です。少しでも不安がある場合は、その情報を入力しない、もしくは別の安全な手段を検討する、「IR・情報室」に相談する、といった慎重な対応をとってください。

*高リスク AI：生命・安全・基本的人権への影響が大きい分野で使用され、誤判断やバイアスによる重大被害の可能性が懸念される AI

⑥ 海外の企業等が開発したサービスを利用する場合、その国の法律が適用されることが想定されるため、特に入力する情報に留意する必要がある

海外企業が提供する生成 AI サービスを利用する場合、データが海外のサーバに保存され、その国や地域の法律（例：アメリカ法、EU 一般データ保護規則（GDPR）、中国の関連法令など）の適用を受けることがあります。国によっては、政府機関によるアクセスやデータ提供義務が課されている場合もあります。そのため、国家機密や安全保障に関わる情報だけでなく、大学として守るべき研究データ・学生情報・地域連携情報などについても、安易に海外サービスへ入力しないよう注意が必要です。やむを得ず海外サービスを利用する場合は、匿名化を徹底し、特定の個人や組織が識別されない形で扱うようにしてください。

4. 領域別留意点

(1)教育における利用

―留意点(教員)―

① 業務の効率化を図りつつ、十分な学修成果と教育の質の保証を担保する

生成 AI は、シラバス案の作成、講義資料のたたき台作成、小テスト問題の作成、フィードバックコメントの例示など、教員の準備・評価業務を大きく効率化できます。一方で、教員自身が内容を十分に理解・吟味しないまま AI の出力をそのまま採用すると、誤った情報の提供や学修目標との不整合につながるおそれがあります。また、学生が生成 AI だけに頼る課題設定では、思考力・表現力・調査力など、本来身につけるべき能力が十分に育たない可能性があります。効率化のメリットを生かしつつも、学修の核となる部分は学生自身の思考に委ねるよう、課題設計や評価方法を工夫してください。

② 授業、課題、試験等において学生の生成 AI の利用を禁止する場合、あるいは、条件付きで認める場合にはシラバスもしくは講義資料等に明示する

生成 AI の利用を禁止する場合、条件付きで認める場合、積極的な活用を促す場合など、授業ごとに方針が異なり得ます。学生との認識のずれや「言った・言わない」のトラブルを避けるため、シラバスや講義資料に、少なくとも次の点を明記してください(口頭での説明に加え、文書での明示を行うことで、学生が安心して適切な利用ができる環境を整えます)。

- ・AI 使用を認める場合には使用条件を明示・記載する
- ・AI 使用を認めない場合にはその理由を明示・記載する
- ・使用を認める場合、どの範囲(構成案の作成のみ、文章の推敲まで等)まで認めるかを明記する
- ・利用した場合の申告方法(レポート末尾への記載様式など)を明記する

③ 生成 AI を用いて講義資料を作成する場合、出力内容を十分に確認・検証した上で使用する

生成 AI を使うと、専門外のトピックでも短時間で資料の骨子や例示が得られるというメリットがあります。しかし、出力された説明や図表が事実と異なっていたり、教育的に不適切な表現や偏った見解を含んでいる可能性もあります。講義資料に採用する前に、教員自身が専門的な観点から内容を確認・修正し、必要に応じて一次文献や教科書で確認してください。また、著作権や肖像権等に抵触するおそれがある画像・図版が生成された場合には、それらをそのまま配布資料やスライドに使用しないでください。

④ 学生の成果物を生成 AI に入力して評価することができるのは、知的財産権の侵害にならない場合に限られる

学生のレポートや発表資料を生成 AI に入力し、「要約させる」「評価の観点を抽出させる」などの方法で教員の評価作業を補助させることは、業務の効率化につながる一方で、権利侵害や情報漏洩のリスクがあります。市販教材の問題・解答を含むレポートや、第三者の著作物を大幅に引用した作品などを、そのまま外部の生成 AI サービスに入力すると、著作権侵害に当たる可能性があります。また、成績や個人が特定できる情報を含む成果物は、学生のプライバシーと著作権の保護の観点から入力しないでください。学生の成果物を AI に入力してよいのは、知的

財産権の侵害になる内容や個人情報を含まないように十分に加工・匿名化した場合に限られます。

⑤ レポート等の課題の設定や成果物の評価において、生成 AI が利用される可能性を考慮する

現在、多くの学生が生成 AI を日常的に利用しており、課題においても何らかの形で AI が使われる可能性があります。

生成 AI の使用を認める場合でも、学生の理解度や思考力の向上を教育目的とするのであれば、理解度や思考力を計るために、レポートや作品の完成品だけで評価するのではなく、構想メモや下書き、参考にした情報源、AI との対話履歴の一部など、プロセスを確認できる要素を評価に組み込むことが有効です。また、口頭試問や小テスト、授業内ディスカッションなどを併用し、学生自身の理解度や思考過程を直接確かめる機会を設けることが推奨されます。

一方、生成 AI の使用を認めていないのに、学生から制作過程で AI を利用したレポートや作品が提出された場合には、AI を使わずに努力した学生との間で不公平が生じ、また学生の理解度や思考力を適切に測ることが損なわれるため、厳正な評価を行う必要があります。

―留意点（学生）―

① 生成 AI の利用についてそれぞれの授業科目の担当教員の指示に従う

授業によっては、生成 AI の利用が禁止されていたり、特定の範囲に限定されていたりします。禁止されている場面で生成 AI を用いてレポートや課題を作成することは、カンニングや剽窃と同様に学則に反する不正行為とみなされる場合があります。まずは各授業のシラバスや教員からの指示をよく理解して、その範囲内で利用してください。

② 生成 AI の利用が認められている場合で、生成 AI を用いてレポート等の成果物の作成を行う場合、どの部分にどの生成 AI をどのように用いたのかを明示する

生成 AI の利用が認められている課題であっても、「どこで」「どのサービスを」「どのように」使ったのかを明示することが求められることがあります。教員の指示を理解して、その指示に沿った対応をしてください。自分の学びのプロセスを振り返るためにも、AI への指示内容（プロンプト）や出力結果の要点をメモとして残しておくとよいでしょう。

③ 生成 AI の出力をそのまま鵜呑みにせず、確認や裏付けを行った上で使用する

生成 AI は便利な「相談相手」ではありますが、常に正しいとは限りません。誤った内容をもっともらしく説明したり、差別的・偏見的な表現を含む場合もあります。レポートやプレゼンで AI から得た情報を使うときには、書籍や一次文献、信頼できるウェブサイトなどで必ず確認し、自分の言葉で説明し直すことを心がけてください。AI の出力を丸写しするのではなく、参考情報として活用し、自分で考えた内容を中心にまとめることが、学びを向上させます。自らの学びや思考の補助のために AI を使用してください。

（2）研究における利用

① 生成 AI が出力した文章をそのまま用いることで盗用や剽窃に繋がる可能性がある

論文や研究計画書、研究費申請書の草稿作成に生成 AI を用いると、表現の整理や構造化を助けてくれるというメリットがあります。しかし、生成された文章をそのまま論文や申請書に貼り付けると、既存の論文と酷似した表現になっていた場合に盗用・剽窃と見なされるおそれがあります。また、多くの学術雑誌や学会は、「AI を著者として認めない」「AI による文章生成を行った場合には方法や謝辞等で明示する」といった方針を定めつつあります。研究者は、自らの責任で文章の内容と表現を確認し、AI の利用を補助的なツールにとどめるとともに、投稿先の方針に従って適切に開示してください。

② 未発表の研究成果やアイデアを入力することで情報流出に繋がる可能性がある

まだ公表していないデータや仮説、研究計画、査読中の論文原稿などを生成 AI サービスにそのまま入力すると、その内容がサービス提供者のサーバに保存され、意図しない形で第三者の目に触れるリスクがあります。たとえサービス側が「学習には使用しない」と明記していても、システム管理者や障害対応時の閲覧、法的要請などにより情報が外部へ提供される可能性はゼロではありません。未公開データや機密性の高い情報はどのような AI サービスにも入力しないでください。

③ 使用に先立って所属学会や論文投稿先のルールを確認し、それに従って研究する

生成 AI の研究利用に関するルールは、分野や学会、ジャーナルごとに異なります。文献検索や要約、英語論文の英文校正などに AI を利用できる場合もあれば、特定の行為（例：AI にデータ解析を丸ごと任せること、査読レポートの作成に AI を用いることなど）を禁止している場合もあります。研究に着手する前、あるいは論文を投稿する前に、所属学会や投稿先ジャーナルのガイドラインやポリシーを確認し、それに抵触しない範囲で AI を利用してください。

5. 生成 AI の利用に関する相談窓口

九州ルーテル学院大学では、生成 AI の利用に関して判断に迷う場合や、トラブルが発生した場合には、「IR・情報室」に連絡・相談してください。相談内容としては、①この情報を入力してよいかどうか、②特定のサービスの利用規約の解釈、③学会やジャーナルのポリシーへの適合性、④学生による不適切な利用が疑われるケースへの対応方法、などを受け付けています。相談したこと自体が不利益とならないよう、安心して質問できる体制を整えています。

6. 学生の学修における生成 AI の活用例

以下は、学生がリスクに配慮しつつ、生成 AI を学修に活用できる具体例の一部です。また、生成 AI の得意分野と不得意分野があり、不得意分野では不正確な情報が提供されるリスクもありますので、特に得意分野での活用例を示します（なお、以下に不得意分野を参考として示しておきます）。

（1）情報整理・構成案の作成

・レポートや論文のアウトラインを作成する（章立て、論点整理）

・複数の視点やアイデアを提示してもらい、自分で取捨選択する
・長文資料を要約したりポイントを抽出する（会議資料、論文など）

（2）言語支援

・英語や外国語の文法チェック・表現改善を行う
・日本語の文章をより自然な表現に整える
・専門用語の定義やより適切な表現を提案してもらう

（3）発想支援

・プレゼンやレポートのタイトル案やキャッチコピー案を提示してもらう
・ディスカッションテーマに対する賛成・反対の論点を整理する
・課題解決のための複数のアイデアを出してもらう

（4）データ整理・分類

・アンケートの自由記述をテーマ別に分類・要約
・大量のテキストからキーワード抽出

（5）学習補助

・難解な概念をわかりやすく説明する例文を生成する
・教科書の要点をまとめて復習用ノートを作成する

＊AI が不得意・不正確になりやすい領域

・事実の正確性が重要な分野（医療、法律、安全保障、人権など）
・最新情報や統計データ（古い情報や誤情報を提示する可能性あり）
・引用・参考文献（架空の文献を生成することがある）
・倫理的判断や価値観に関わる内容（偏見や差別的表現が混入する場合あり）
・完全な創造性が求められる成果物や作品（AI の出力は既存データに依存するため独創性に欠ける）